

氏名	ZHAO Danna (赵丹丹)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第43号		
学位授与日	平成24年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	<b>線の中に見える風景</b>		
審査委員	主査教授	島尾新	
	副査教授	本江邦夫	
	副査教授	中野嘉之	
	副査	渋谷区松涛美術館 学芸係長	味岡義人

## 内容の要旨

日本に留学して以来、常に中国画と日本画のそれぞれの美を考えてきた。私は日本画が好きで、岩絵具の粒子の感触、独特な質感、重ねた色の美しさにはいつも感動する。それを学ぶうちに、日本画の微妙なグラデーションや粒子の違い、そして筆づかいによる変化が、線の多様性と似ていることに気付かされた。それを動機として、本論文では線の表現を中心に論じてきたが、その結果として分かったことをまとめておきたい。

第一章「線についての基礎的な研究」では、筆から生まれる線についての基礎的な研究として、「十八描」を考察した。十八の線の呼び名は、単に技法を表すのではなく、鑑賞面から感覚的・審美的に分類したもので、主観的なものでもある。しかしその分類は非常に有意義であり、先人が積み重ねたものを追体験しその総括を学びつつ、自らの感性や経験と照合することにより、線描の本質に近づき体得する為の道標となる。その有効性は、私自身の解釈によって描いた十八描、また自作のなかで用いた線の解析によっても確信された。

第二章「王蒙の作品に潜む線の力」では、600年前に線の造形原理を実験した画期的な画家である王蒙の二つ作品を取り上げ、その表現について詳細に分析した。そのなかで、王蒙の線の表現が、自然と画家の心理、漲る動感と不安、そして虚と実など、ふつうは相反すると見られるいくつかのものを、同時に表現し得ていることを論じた。そしてそこには線自体のもつ強い張力とエネルギーが大きく働いていることを確認し、また画面構成の原理を理解することができた。

第三章「自分なりの日本画への研究」においては、第一章から第二章までの分析を踏まえた上で、自己の作品の分析と将来表現の方向性について考察した。自作の形成過程を分析しながら、線と岩絵の具は画面の中でお互いに融合することができ、線の表現によって

岩絵の具のすばらしい発色を喚起することができる。また線を描くことは日本画の表現に非常に適しており、画面に重要な要素として存在する。これらはさらに新しい作品の誕生に繋がって行くと考えられた。本論文を書くなかで、多くのことを学び、様々なことを再認識することができた。今後の制作への道標も手にできたように思う。線の世界が私の心の奥を表し、色が私の感覚を刺激する。岩絵具と出会い、墨線との融合を模索した。言葉を超え、国境を超え、共感できる美しい風景を描きたいと試行錯誤を繰り返してきた。心の襲と波が重なり、いつしか「土」で「水」を描き、大地とつながる海を描きたいと考ええるようになった。当面は、大地である岩絵具を使って、水である海の表現にチャレンジし続けながら、また様々な題材にチャレンジし、表現の層を増していきたいと思う。

私にとって絵を描くことは、喜びであり、自身の魂との対話でもある。また、描いた作品を通じて、私の内なる世界は外部の世界に可視化される。それは人々とのコミュニケーションでもある。今後も自らの表現でより多くの人々と対話をしていきたい。言い過ぎかもしれないが、留學生活の成果として、瀋陽と日本を融合した新しい絵画、新しい自然表現を目指したいと考えている。「路漫漫其修遠兮、吾上下而求索」。学問の道は遠くて辛いものだが、私はたゆまず摸索していくという屈原氏の言葉を心に置いて、精進して行こうと思う。

## 審査結果の要旨

本論文の筆者・趙丹娜は日本画を専攻する中国からの留学生である。筆者は幼い頃から伝統的な書画に親しみ、筆と墨による線の表現に喜びを見出して興味を深め、それを基調とする制作を行っていた。そこにさらに日本画の技法と色彩を持ち込み、新たな表現の地平を開こうというのが日本への留學の目的であり、本論文の執筆の動機ともなっている。

本論文の構成もこれに対応して、第一章「線についての基礎的な研究」で、いわゆる「十八描」を中心として中国絵画における線の基本的な分析を行い、第二章「王蒙の作品に潜む線の力」で、筆者が最も影響を受けたという王蒙の作品を詳細に分析して、線の表現の可能性を具体的に語り、第三章「自分なりの日本画への研究」で、自作の展開を追いながら、線と色面を組み合わせた筆者に独自の「日本画」の模索へと進み、そのための具体的な方法と可能性を提示して論を閉じる。制作者による論文としては、オーソドックスな構成となっている。

冒頭では墨線による表現の重要性が簡単に押さえられ、第一章「線についての基礎的な研究」へと進む。ここでは「破墨」「澆墨」などの基本的な筆墨法が説明され、さらに「十八描」が詳細に分析される。「十八描」は明代末期に、それまでに現れた衣を描く線の種類を「高古游糸描」「琴弦描」「鉄線描」「混描」「曹衣出水描」「釘頭鼠尾描」「撇頭釘描」「馬蝗描」「折蘆描」「橄欖描」「棗核描」「柳葉描」「竹葉描」「戰筆水紋描」「減筆描」「枯柴描」「蚯蚓描」「行雲流水描」の十八種に纏めたもので、呼称には若干の異同があるが、周履靖

『夷門廣牘』、汪珂玉『珊瑚網論畫』、鄒德中『繪事指蒙』などに記されている。筆者がこの基本的な事項を敢えて取り上げ、自ら描いたものを提示しながら分析したのは、次章へ展開するための基盤を作ると同時に、日本へ留学して中国におけるほどには筆と墨による線が重視されていないことを感じたからだという。確かに多様な線を用い、それを基調として制作する作家は日本には数少なく、この状況に対する一つの問題提起ともなっている。

第二章「王蒙の作品に潜む線の力」では、台北の国立故宮博物院に蔵される「具区林屋図」が分析される。描かれた内容とモチーフの構成のディスクリプションに始まり、岩や波における線の動勢や墨の濃淡とアクセントの効果などへと進むその記述は、執拗といえるほどに詳細である。筆者はその表現に王蒙の不安と憂鬱など複雑な感情を見出し、改めてこの作品を画期的なものとして位置づける。「具区林屋図」については、すでに多くの先行研究があり、明確に新しいといえる知見はないが、画面を見つめスキャンしてゆくようなまなざしの真摯さは評価できる。制作者の視点からするここまでの詳細なディスクリプションは従来なく、この作品についての語りに新たな一つを積み重ねたといえるだろう。先行研究についても、若干の不備は見られるものの、きちんと引用されている。さらに本章では、王蒙の「青卞隱居図」が分析され、その影響を強く受けた文徵明の「倣王蒙山水図」、董其昌の「倣古山水図」との比較が行われて、王蒙の特徴が確認される。

第三章「自分なりの日本画への研究」では、筆者自身の作品を継時的に分析しながら、将来の展望へと繋げる。まず初期の作品では「十八描」のいくつかを組み合わせることで得られる基本的な効果が説明される。ここは第一章の分析を自己の作品で繰り返したものである。そこから現在描いている海・波というモチーフとテーマ、岩絵具と線と組み合わせる表現の方法についての主張に進む。

海・波を描くようになったのは、一つには、ときに穏やかにまたきらめき動くその視覚に、二つめにそのエネルギーとうねりに惹かれたからであり、さらに故郷である瀋陽で親しみテーマとした「大地」に対して、日本を象徴すると感じたのが「海・波」であり、かつそれは中国とを繋ぐものであるからであるという。極めて素直なテーマの設定だが、これが筆者の特徴である。

一方で、日本画で用いられる岩絵具の粒子の質感、塗り重ねたときの発色とグラデーションの美しさに、線の多様性に似たものを感じるという。やや分かりづらいが、ここが筆者に独特の感覚で、岩絵具と線とを組み合わせることにより、新たな表現の可能性が開けるといい、これを「岩絵具と線の共鳴」と呼んでいる。

上記の二つが画面のなかで融合させられることになるのだが、従来の作品ではそこに「共鳴」を欠く部分を生じていた。しかし、最後の作品「浩浩蕩蕩」では、下図にまず細かな粒子の顔料で描き、やや粗い粒子の顔料を重ね、墨と顔料の線で波形を描き起こして、さらに画面全体に薄く肌色の顔料をかける、という方法で「共鳴」の実現への方向性を見出し、海のもつエネルギーの強さを失わないまま、海の色と深みとともにデリケートに表現することに成功しつつある。「大地である岩絵具を用いて、水である海を表現しようとチャ

レンジしてみた」というのはいかにも中国的な表現だが、この章で語られる技法論・表現論は、この大きな気分のテーマを支える基盤として説得力のあるものとなっている。

総じて、論の目的・論述ともに明快であり、制作論として十分に評価できるものである。筆者なりの独自の日本画という最終的なテーマが完遂されたわけではもちろんないが、その可能性と今後の展開の方向が、具体的な技法を含めて明確に提示されており、学位を授与するに相応しいものと結論した。